

# 大野良興物語



1990年代の初頭、大野記念病院は未曾有の危機に直面していた。  
バブル崩壊の影響を受けて日本経済全体が停滞する中、  
病院の患者は3分の1ほどに激減。

# 大野記念病院

経営が立ち行かなくなる状況になっていた。

この病院は祖父から、  
父から受け継いだもの…。

院長室

病院を手放すか、否か。  
この苦しい時期を乗り切るか。

今までは  
失われてしまう。



この重大な岐路に立たされていたのは  
大野記念病院の3代目院長、大野良興であった。

大野良興は1946(昭和21)年3月14日、  
大阪府豊中市に、3人兄弟の長男として生まれた。



祖父は西区南堀江に大野病院を開設した大野良蔵、  
父は2代目院長である大野良雄。  
良興にとって、病院のあとを継ぐことは、生まれたときからの宿命であった。

幼い頃はあまり体が丈夫でなく、  
性格もおとなしい子供だった。



当時の豊中市のあたりは、  
まだ牧歌的な趣を残していた。

小学校は、大阪教育大附属の池田小学校に進学。  
父母のすすめで小中高一貫の名門校を選んだ。



「将来、病院を継ぐために」というレールが  
この頃から敷かれていた。



良興自身も自分が将来医師になることについて、疑問は全くなかった。

将来は医者か、  
オーケストラの指揮者に  
なりたいな。

でも音楽の才能はないから  
やっぱり医者だろうな…。

大野家はルーツを福岡県に持つ名家であり、  
子供の教育はもちろん、礼儀作法にも非常に厳しかった。

大野家の男子は15歳の節目に「元服式」を行うというしきたりがあり  
経済界や政界から賓客を招き  
良興も大野家の家紋がついた着物で、元服式を堂々と迎えたのであった。

そんな良興の人生に  
大きな転機が訪れた。

高校3年の2学期の終わり、  
12月20日に行われていた  
終業式の最中だった。

大野、  
すぐ家に帰れ！

それは父であり、  
大野病院院長の大野良雄氏の急逝である。

父の病名は「くも膜下出血」。良興が病院に到着した時には  
すでに著名な脳神経外科医によって開頭手術を行っていたが、  
2日後の12月22日に亡くなった。

南御堂で行なわれた葬式の喪主は良興が務めた。  
多くの高名な方々が参列され、早すぎる死を嘆き、  
生前の父の人望を実感した。

もう、目指していた  
父の背中が  
遠く消えてしまった…。

これからは  
自分が大野家の未来を  
切り開いていくんだ！

以前は漠然と「将来は医師になるんだろうな」と  
考えていた良興だったが、  
ここに来て、その決意が確固たるものになった。

高校生ながら  
後継者としての責任感が芽生えたのである。

病院は、母が理事長、  
形成外科医だった叔父が院長代行となった。  
良興が院長になることを全ての人が待ち望んでいた。

1965(昭和40)年、良興は大野家のルーツである福岡県の久留米大学医学部へ進学。



大学生活では卓球部のキャプテンを務めるなど、忙しくも充実した6年間を送った。

医学と共に学んだ六人の仲間とも学生時代を有意義に過ごした。彼らとは今でも親しく付き合っている。



医師国家試験にも無事合格し、晴れて医師免許を取得。合格発表は掲示板に張り出されたが、自分の名前を発見したときは万歳三唱した。

公衆電話から母にも電話した。

母さん、やっと医者になれたよ。  
帰るまでもう少し待ってください。

卒業後はインターンとして、  
東京女子医科大学病院へ。

父の足跡を追い、消化器外科分野を選んだ良興は、  
消化器分野で著名な中山恒明教授のもとで学ぶため  
「消化器病センター」のある同大学病院を研修先に選んだのだ。

病院のすぐとなりに寮があり、  
毎晩呼び出されて診療にあたるなど  
研修医としての業務に追われたが、  
それが当たり前と思っていたので  
苦にはならなかった。

3年間があっという間に過ぎ、  
良興は29歳になった。

「そろそろ、病院を継いでほしい」という母の願いもあり  
昭和52年、良興は大野病院3代目院長に就任した。

若くして院長になった良興のスタートは決して順風満帆ではなかった。

病院にはキャリアを積んだ年配の医師や職員が多く「大野家の跡取りとはいえ、果たして何ができるのか」という懐疑的な目も少なくなかった。

そんなプレッシャーの中で良興が心がけたのは「自ら率先して動く」こと。

朝一番に来て、最後まで残って働く。

院長であるにも関わらず、当直も積極的にこなした。

そして何より知識や技術に対する謙虚な態度を持ち続け先輩医師や看護師から多くを学んだ。



この一貫した姿勢により、徐々に周囲の信頼を勝ち得ていった。

逆に、若さの持つエネルギーを活かして、病院に多くの革新をもたらすべく良興は病院の体制や働き方を大胆に変革していった。

例えば、昭和50年代というと、  
病院では医師がピラミッドの頂点にあった時代。

しかし良興は、  
看護師、医療技術者、事務、すべての職員が  
自分の職務に責任と発言を持てる制度づくりを理想とした。

医師への反対意見でも何でもいい。  
本音で意見を言える空気を作りたいんだ。  
反対意見が出ないような職場は  
どこかで駄目になってしまう。

次に、医局の改革。  
良興は、若手の有望な医師を大学病院から  
どんどんスカウトして  
医局に新しい風を吹き込んだ。

この病院では、  
単に医師が偉いという  
考え方は要らない。

新しいことにチャレンジできる、  
病院風土をつくるためである。

医師と言論を闘わすこともあったが、  
考え方を曲げることはなかった。

全てのスタッフが  
患者を第一に考え、  
それぞれの意見を尊重し合う。  
そんな環境を作りたいのです。

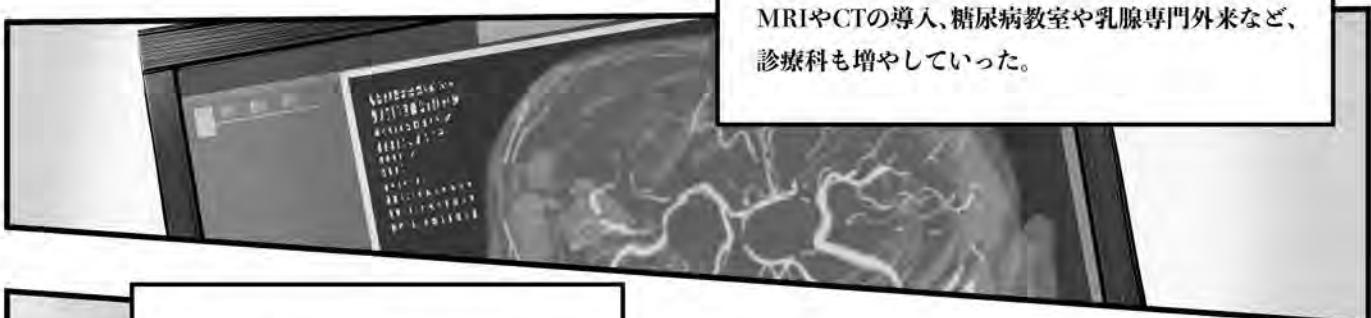
良興はさらに、人工透析や集団検診といった新たな分野への投資にも注力。  
人工透析は5床からはじめ、今では「透析長寿日本一」をビジョンに  
腎臓病センターを設置し、寿楽会クリニック、ハーバータウンクリニックを開設した。



また、健康志向の受診者が増えたことを背景に、  
御堂筋沿いに企業健診のm・oクリニック、  
人間ドックの大野クリニックを開設している。



さらに脳神経外科を開設したり、  
MRIやCTの導入、糖尿病教室や乳腺専門外来など、  
診療科も増やしていった。



行動力と先見の明で、  
良興は病院を大きく発展させていった。



そして1989(平成元)年6月6日、病院を西区南堀江一丁目から  
現在の地に移転させ、近代的な病院として生まれ変わり、  
名前も「大野記念病院」として再スタートする。

順調に発展していく大野記念病院だったが、1990年代に入ると、その成長に影が差す。

それはバブル崩壊という経済的危機だった。良興が院長になって最大のピンチが訪れたのである。

院長室

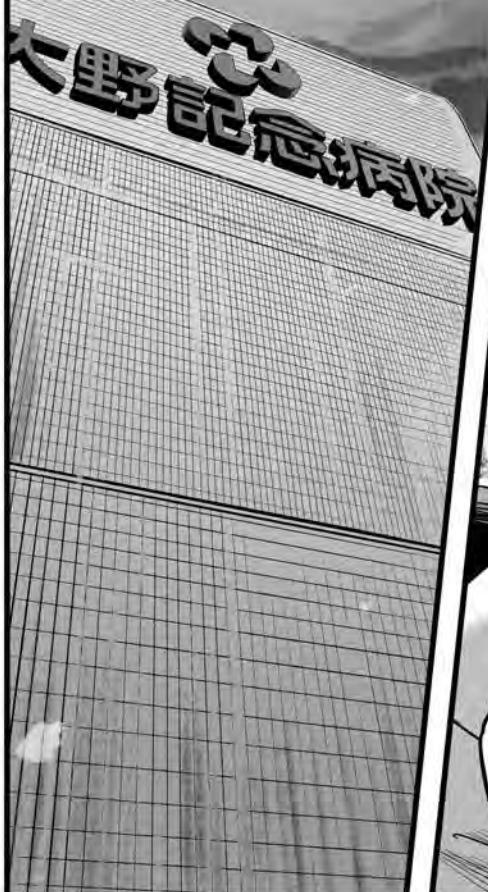
良興は連日、医療崩壊という難問題をどう乗り越えるか日夜検討する。



病院を手放すという選択肢は考えられない。

祖父や父への責任もあるし、

何より地域の人々に質の高い医療を提供できなくなる。



良興は身を切る思いで職員の一部を削減し、  
病院の規模を縮小した。

元に戻るよう、病院の回復に正面を向いて  
仕事に精励する努力を継続することで、  
開院以来最大の危機を乗り切った。

この時代を経験したことは、  
良興の病院経営にも大きな影響を与えた。  
地域に貢献する医療機関としての方向性を  
はっきり意識したのである。

自分がなぜ、  
大野記念病院の存続にこだわるのか。  
それは地域の人々に  
最高の医療を提供したいからだ。

地域のために、  
これからも発展していきたい。

地域のために尽くそうと  
気持ちを新たに病院経営に向き合った良興。

そんな折り、  
1995(平成7)年に阪神淡路大震災が発生した。

早朝に強い揺れを感じ、  
すぐに飛び起きて病院に電話。

幸い、病院には大きな被害はなかったが  
次の日にはもう職員を連れて神戸へ向かっていた。

もちろん道路が崩壊しており、  
歩いて武庫川を越えて神戸に入る。

先生、もう少し  
状況が落ち着いてからでも…  
キケンですよ

医療に携わる者として、  
震災の被災者がいるなら赴くのは  
当然のことでしょう。

最初は5名で向かったが、  
想像を超える現地の様子に、一同は呆然。

これは長丁場になると思い、  
スタッフを交代で派遣することにして  
約3ヶ月にわたって現地での救援活動を  
展開したのであった。



大野記念病院のほうでもまた、  
1000名以上被災した患者さんを受け入れた。  
のちに、当時の厚生大臣から支援活動に対して  
感謝状が贈られた。



そして、1998(平成10)年、  
理事長に就任し、新たな病院改革を担う。  
長く医療の第一線で活動してきた経験を元に、  
病院経営に専念する道を選んだのである。



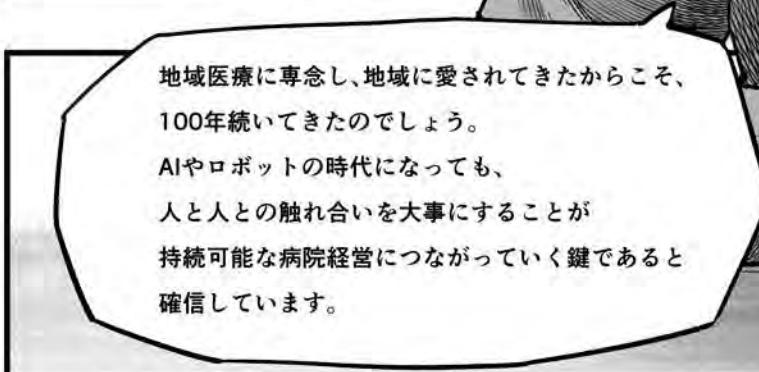
良興は2023(令和5)年まで約25年、  
理事長として病院経営を支え続けてきた。  
この間に行なった改革は数えきれない。

患者総合支援センターの設置、  
地域の先生方との公開討論会、QC活動、  
最新鋭の医療機器を導入することで、  
「地域に最高の医療を提供する」という信念を  
実現してきた。



開業医の先生との連携、  
これが一番大事ですね。  
地域全体で患者さんを  
支えていくのが医療の本質です。

2024(令和6)年1月1日に病院開設100周年を迎えるのを機に、  
良興は、副院长である息子の良晃へ、理事長をバトンタッチする。  
様々な苦難を乗り越え、100年間も続いてきた大野記念病院は、  
次の100年を歩む次世代へスタートを切った。



地域医療に専念し、地域に愛されてきたからこそ、  
100年続いてきたのでしょう。  
AIやロボットの時代になっても、  
人と人との触れ合いを大事にすることが  
持続可能な病院経営につながっていく鍵であると  
確信しています。

### 社会医療法人寿楽会 大野記念病院 理念

「私たちは心のふれあいと  
安全で質の高い専門医療を通して、  
人々に最良の癒しを提供します」